

■インタビュー テレビ和歌山 業務本部 局次長待遇 山田みゆき 様

Q1. 御社の事業内容や会社概要について教えてください。

株式会社テレビ和歌山 和歌山県民の皆さんでしたら、一度はご覧になっていたことがあると思います。和歌山県内の現役の民間放送の地上波テレビ局と固く言うところなるんですけれども、和歌山県内でのみ映っているテレビの番組、それを作り放送しているというのがテレビ和歌山なのですが、詳しい事業内容とか会社概要はいろいろ皆さんで調べていただいたら分かるかと思います。

Q2. テレビ和歌山のビジョンやこれから目指したいことについてお教えください。

はい 2 番目の質問にしてはすごく難しくて大きな質問なんですけれども、もちろんですね、たくさんの皆さんに見ていただく、テレビ放送を皆さんに送り出すこと、これが第一義で、何と言っても地域社会と共に歩んでいく皆さんのお役に立つ情報を提供して、かつこれからの時代、いろんなメディアが SNS であるとかインターネットでたくさんのメディアがある中で、テレビ局として何ができるのかということをしっかり考えながら前に進んでいくことというの大切にしています。

Q3. テレビ和歌山がこれまで地域とどのように歩んできたか、地域メディアとしての使命、そして今後のテレビ業界や地域メディアの中で目指す方向性についてお教えください。

また、これもとても大きな質問なんですけれども、まず、これまでどのように歩んできたかということなんですが、皆さん一度はご覧になったことがある夏の高校野球和歌山大会、これ、実は全国の中でもテレビ、和歌山だけがですね、1 回戦から全試合、実況生中継というのを行っています。それがすごく皆さんに受け入れられて、今、野球王国和歌山って言われている、その一助となったのではないかと言われるほど、テレビ放送を続けてきたことが、県民の皆さん的生活に、生活の一つになっているというのが、まさにこの地域とともに歩んできたという取り組みの一つじゃないかなと思っています。

これからを目指す方向性、地域メディアの中で目指すということになりますと、今お話しした高校野球のように、よりその県民の皆さんの大切にしていることに寄り添って、それが皆さんのが共感を得る、さらに言うと、それが一つの産業とまで言うとあれなんですかとも、全国に誇れる何かになる、そういうことを作り出せるメディアでありたいなと思っています。

Q4. これからのテレビ局はどのように変化していくとお考えですか デジタル時代の挑戦についても教えてください。

今までだと本当に私たちが小さい頃は、テレビっていうとすごくて、テレビに映るとテレビカメラがきたなんていうと、本当にもうお祭り騒ぎだったんですけども、今では本当にもう誰でもスマートフォンで映像を撮れますし、インターネット、SNS を含めてなんですかとも、いろいろなことができるようになっているっていうのはもう間違いないことです。

ただし、そのコンテンツを作るっていうのは、絶対に技術だけではなくて、人間が人から聞いたこと、そこで何を感じたかっていうことこれが感性っていう部分が、大切なんじゃないかなと思っています。なのでデジタル時代の挑戦っていうと、何か技術的なことをより磨いていくようなイメージもちろんそれはあると思います。良いカメラが安く手に入ると、みんながいい映像、綺麗な映像とれるように間違ないです。だけれども、何を撮るのか、その部分の中でどれを切り取るのか、あるいはこうやってインタビューをしていても、こんなにたくさん話した中でどこが心に残ったのかっていうのを感じることができるのが、この多様化する時代では、より大切になってくるんじゃないかなと思っています。

Q5. 御社が大切にしている社風や価値観は何ですか。

まず一つは信頼性。間違えた報道はやはり許されないことと考えていますし、それについては非常に会社の中でも、一番気をつけてることの一つだと思います。信頼性と、ただそれに縛られ過ぎて自由度を失うっていうことは、ちょっと残念なことではあるので、そういう信頼性を保ちながらも、やはり自由な発想で何かにチャレンジするということは、妨げられることのないようにいろんな意見を汲み上げられるような、そんな社風でありたいと思っています。

Q6. 会社の中でイノベーションや新しい事へのチャレンジはどんなふうに推進されていますか。

ちっちゃなことでいうと、やっぱり 新しいことへのチャレンジっていうのは、口に出せる環境かどうかっていうのが、まず第 1 歩、そこだと思うんですね。そういう意味で、コミュニケーションの 何と言いますかね、お互いのレンジはいろいろありますね。先輩後輩の中であったり、もっと上の上司であつたりって、そういう垣根を越えて、やっぱり声を掛け合う、何か面白いことない、これさ、こうやりたいんだけどどうしたい？ とかっていうやりとり、これが口に出せるか出せないかっていうところが、やっぱり第 1 歩そこは大切にしたいなと思っています。

Q7. 社員同士のコミュニケーションやチームワークで意識しているポイントはありますか。

今もちょっと話をしましたけれども、やっぱりもうこうやって、入社 30 何年経つと、やっぱり後輩がどんどん増えて、若い子たちっていうのは本当に親子ぐらいの差があるんですけども、同じベクトルで進んでいく。仲間としては、歳は離れていても、ベクトルが同じであれば、交われるところって必ずあると思うんですね。そういうところを見出しながら、なるべく会話する、なるべくつながりを持つっていうところで、みんなのどういうところが得意なのかな、皆さんの得意なところを見つけ出すっていうところを意識しています。

Q8. 御社の福利厚生制度について、特に力を入れている点や特徴的な制度、また、それを利用されたの社員の方々の反応について教えてください。

そうですね 福利厚生面のことをやっている会社に比べると 意外と少ない方だとは思うんですけども、社員旅行があつたり、ぶんだらのお祭りに出て、その後 みんなでちょっと食事会があつたりとかっていう、そういう常に コミュニケーションの場を作りましょうという、本当にテレビ局っていうのは働く時間が 皆さんまちまちなんですね なかなか一緒に会するっていうことができなくて、なので2つの班に分けたりとか、そういったことで何とか、いろんなコミュニケーションを取る方法、なるべく心がけています。

Q9. 営業部では、具体的にどのような業務を担当されていますか。

どちらかというと私はこれまで入社以来、報道部が 16 年、制作部に 16 年いて、それから営業部に異動したので、現場の知識がやっぱり 普通の営業部の皆さんよりは多いと思うんですね。なので そういうことを活かして、どちらかというとセールスの企画を作るということも多いです。ただ支援をするだけじゃなくて、こういう形で御社の PR をしてみませんかというパッケージを作ったりとか、担当のセールスと一緒に その商品の説明に行かせていただいたら、一方で番組の制作とかプロデュースというところになるんですけども、こういった番組を販売しませんか、販売していませんかとか、こういう番組を作るのでセールスの企画を作ったりとか、企画のところが結構メインになって、作るのも まだやりながら、いろんな出演者の調整したりとか、そういうこともやりながらというイメージですね。

Q10. アナウンサーとしてのご経験の中で、特に印象に残っている出来事はありますか。

そうですね、インタビューさせていただいたいろんな人、心に残っている言葉もありますし、すごいたくさんありすぎてあれなんですけどもそうですね。和歌山の 大きな出来事といえば、和歌山国体の開会式の総合司会をさせていただいたことで、大きな舞台で司会をさせていただいて、すごい人たちのこう努力と取り組みとか、いろんな苦労、もう何年にもわたってのがあって、その土台の上にステージがあってっていうことをあれほど強く感じたことは、もうほんと一人では何にもできない、すごい人が、数か思いとかが全部本番 1 発にかかるっていう重みとか、すごい心に残るお仕事でした。

Q11. 営業の仕事とアナウンサーの仕事は一見違うように見えますが、共通点や相乗効果はありますか。

普通にテレビ局でいろんな局で働いていらっしゃる方も、何でアナウンサーなのに営業ってすごい、皆さん思われると思うんですけど、テレビ和歌山でアナウンサーの仕事をして、ずっとやってきて思ってくることっていうのは、やっぱりいろんなことをもっと発信していきたい和歌山の良いところであったり、例えばそれは和歌山の良いところを発信するのは、いわゆるアナウンサーであったり、報道であったり、制作であったりなんんですけども、営業に行った場合は、この会社のどういうところを、どうしたら一番良く発信できるんだろうっていう考える思考っていうのは、実はおんなじで、この良さを見つけて、それを発信するっていう作業っていうのは、やっぱりアナウンサーをやってきた中で培ってきたことですし、その感性があるがために、すごくやっぱりお話をさせていただいても、企業の方とのいろんな打ち合わせの中でも話をくみ取るっていうところを今までやってきたことと同じだなと感じるので、私の中では割と一貫したものがあるので、そういう意味ではめちゃくちゃ違わなくはない。私の中では一貫性はありますね。

Q12. テレビ業界に入ったきっかけや動機について教えてください。

私の場合は最初の入り口は、テレビというより、やっぱりアナウンサー志望だったんですね。これはもう大学の時に、アナウンサー学校に通ってたんですけども、アナウンサースクールに入ったのは友達が行くっていうんで入ったぐらいだったんですけど、その教室で学んだことが何かこれはアナウンサーという仕事は本当に一生かけてやるべき仕事だなっていうふうに思えるような恩師であったり、先輩方がたくさんいらっしゃったので、うん、もう入社のその就職は一般の会社とか全く全国のアナウンサー試験を行脚して受けて、でも、ただその中でもやっぱり地元なんですね、和歌山が。なので和歌山で仕事をしたいっていうのはすごい強く思ってたので、幸いその勉強をしていたことが功を奏して、入社することができました。

Q13. 女性管理職としてご苦労された点や、逆に強みと感じる点はありますか。

女性 意外とこのテレビ和歌山、女性の管理職の人数が多くて、女性だからとか管理職だからっていうのはあまり普通にいると意識しない感じではあるんですね。それくらいフラットな会社だなって思うんですけども なので逆に苦労をしたことは、そんなにそんなにないですかね。強みと感じる点、強み、男の人よりちょっと柔らかくみんなとしゃべれますよね。ちょっと優しくしゃべれる優しい振りしてね振りしてしゃべれる、いいところです。

Q14. 和歌山県に住みながら、テレビ業界で働く魅力ややりがいを教えてください。

今やっぱり何でも東京志向というか、中央志向、都市志向なんですけども、テレビ業界においてはもちろん規模感が違います。東京のテレビ局、大阪のテレビ局とテレビ和歌山の全く規模感は違うんですけども、やることは一緒なんですよ。私 1 年に一回、高校サッカーの仕事があって、それを全国のアナウンサーが集まって、他局のアナウンサーたちと話もするんですが、ローカル局であればあるほど、知識が多いというか、いろんなことをやるので、いろんなことを知っていることが、すごい強みになる。

本当にそれを私、まだ若い頃に先輩の他局のアナウンサーにも言われたんですけど、テレビ和歌山、今更の説明すけど、独立局で言って、系列のない局なんで、自社制作の番組とかがすごく多いですね。アナウンサーも制作に関わったり、報道に関わったりすることが多くて、やっぱりやってるだけの知識って、すごいあって、それがやっぱり、アナウンサーの仕事に、生かされているねっていうことは、よく言われて、ローカル局であればあるほど、腕の技術は身につくというふうに。うん、それは間違いないと思いますね。

Q15. テレビ和歌山で働くことで個人として成長できたと感じる事があれば教えてください。

本来だったら、アナウンサーって、原稿を読んだり、綺麗な声でナレーションをしたり、司会をしたりっていう仕事なんですけども、この局だったからこそ、自ら企画を立てて取材に行って、台本を書いたり、原稿を書いたりっていう中で、すごい苦しんで生み出して 制作部の頃は一つの番組を作ったりとか、それも この局じゃなかったら、できなかっただろうなと思うことが、本当にたくさんあります。

Q16. 若手社員に求める人物像について教えてください。

共通して言えることは、やっぱり楽しく働いてほしい。苦しいこともあるんですよ。仕事をする中で苦しく悩んで何かを生み出したり、やり遂げたりすることはあるんですけども、やっぱりその後にやり遂げた達成感とかを持ってほしいし、基本的には楽しく楽しい日々を送ってほしいってすごく思います。

苦しいと思った時に、しんどい仕事をやっている時でも、きっとこれが終われば達成感があるって思ってもらえるような、そういう働き方をしてほしいなと思います。

Q17. 新入社員の研修や教育体制について教えてください。

新入社員の研修部署によっていろいろなんですけれども、基本はやっぱり一番近い年上の先輩が、実地で教えるっていうのが、一番よくあるパターンかなと思います。最初はちょっといろんな部署を回って、各部署がどんなことをやってるかっていうことも見るんですけども、割と早い段階で実際に現場に出て経験しながら学んでいくっていう形が今一番多いと思います。

Q18. 学生時代のご経験や学びの中で、今のキャリアに活きていることは何かありますか。また、今の学生に向けて学生のうちにやっておくと役に立つ経験や心構えがあれば教えてください。

実は私自身、大学時代に専攻していたのが、世論っていう学問で、人がものを見たときに、人は人の話を聞いたときに、いろんな経験をしたときに、何を見たらどう感じるかっていうことを分析するっていう学問だったんです。今すごく役に立っています。大学時代の卒論も、新聞の見出しで一番大きい文字で書いてる文字を読んだときに、人はその文字を見てどう感じ、何を感じるかとかっていうのをいろんな新聞で分析してみたいな。それは本当に役に立っていて、今お話をすると同時にどういう言葉を使えばどう感じ取られるか、何を見たらどう感じるか、ということを大学時代の学びはそこにあったので、それをこのお仕事をする中では役に立ってるなっていう、堅い話でいうとそうです。

だけでもう一つは、やっぱりさっきも言いましたけども、あのアナウンサー学校に行って、いろんな先輩たちと出会って、恩師と出会えたことが、やっぱり今の自分を一番作ってるかなというふうに思うのと、今の学生の皆さんっていうのは、何か今ちょっと会話するってことが、割とみんなちょっと少なくて、ちょっとSNSでちょっとやりとりしたりとかって多くなってるんですけども、やっぱりそれよりは、対面でこうやって話すと全然違うと思うんです。一回でも対面で会っていれば、あとはSNSでいいと思うんですけども、そういうメールだけのやりとりとか、チャット系の文字だけのやりとりでなんとでもなるってもんでもないと思うんです。対面で、いろんなコロナという時代を経て、世の中の考え方も随分変わりましたけども、やっぱり人に会う、たくさん的人に会うっていうこと、それはもう学問じゃなくても、遊びでもバイトでも旅行でもなんでもいいと思うんですけどもたくさん的人に会ってください。

Q19. 就職活動中の学生に向けて、温かいメッセージやアドバイスをお願いします。

本当に、さっきもちよっと言いましたけども、私自身の経験でいうと、アナウンサーになりたいと思って、あちこちの局を受けて、受けても受けても受からず、もう箸にも棒にもかからずっていう時間をすごく長く過ごした一人です。で、だけどその時に、ずっといろんな先輩から言っていただいてた言葉が、諦めなければ必ずなれるよって言われたんですね。落ち続けても結局落ち続けても、次の年にまた受けるダメならその次の年に受ける それをどこまでするかの問題なんですけれども、あきらめなければ必ずなれるよっていうのを言ってもらっていました。

一般企業への就職っていうのは、またちょっと違うかもしれないんですけども、自分の経験からもしあドバイスできるとすると、どんなにうまくいかなくとも ダメだダメだって思っても、そこで諦めるんじゃないくて、やっぱり自分の中で何が悪かったのかっていうのを、ブラッシュアップはもちろん必要なんですけれども、一番大切なのは、諦めないことだと思います。